# 強く生きる

中　二

「何で黒いの。」
「何で髪の毛クルクルなの。」
私はこんな質問を多くされる。嫌なわけではないが、答えに困ってしまう。
　私は、セネガルと日本のハーフ。つまり、黒人とのハーフだ。小学校三年生くらいまでは、自分の外見を気にしたことはなかった。しかし、高学年になるにつれ、髪の毛をストレートにしたいと思うようになった。なぜなら、男子に髪の毛のことを笑われたからだ。最初は、そんなに気にしていなかった。でも、電車に乗っていると、いろいろな人から冷たい視線を送られているような気がするようになった。「そんなに私の顔、変なのかな。」私は、鏡を見た。笑われたこともあったけれど、笑われる理由が分からない。そして、一気に自信をなくした。お団子にしたり、三つ編みにしたりして、私は髪の毛を隠すように、いろいろと髪型を変えてみた。
　そんなときお母さんが、
「アメリカに遊びに行こう。」
と言った。不安な気持ちと、ワクワクした気持ちでアメリカに行った。街なかを歩いていると、向こう側から歩いてくる黒人の女性が、髪を結ばず、ありのままの姿で堂々と歩いていた。私はそれが信じられなかった。今までコンプレックスだった髪の毛を、あの女性は生かしていた。その女性は美しかった。私は、日本人にはない特別なものをもっているんだと思い、ありのままの自分で強く生きようとそのとき決心した。
　それから私は、髪の毛をおろしてみるなど自分の髪の毛を生かし始めた。でも、まだ不安に思っていることがあった。それは、中学校での生活。私はあえて、学区外の中学校に進学したので小学校からの友達はほとんどいなかった。そんな中、私はうまくやっていけるのかとても心配だった。
　入学式。私は髪の毛のことが怖くて三つ編みをして行った。クラスの子が、私の外見をあまり気にしていなかったので、「明日からは三つ編みはやめよう。」と思い、また元の私に戻ろうと決めた。
　二学期。校内を一人で歩いていると、何人かの

男子の先輩とすれ違った。その直後、さっきの先輩たちが笑った。「もしかして、私のことで笑ったのかな。」と考えてしまい、とても怖くなった。これからもずっと笑われる気がした。「日本では、一人だけ浮いてしまう。からかわれる。」私はもう、どうしたらいいのか分からなくなった。

数日一人で悩んでいたけれど、思い切ってお母さんに話してみた。お母さんは、

「気にしなくていい。外国では、黒人のモデルさんもたくさんいる。日本にだって、テニス選手がいる。だから、大丈夫。」

と言ってくれた。でも、何度も辛い思いをした私には、そんな軽い気持ちでいられるはずがなかった。でも一方で、心の底では、人々に大きな影響をあたえる「カッコイイ女性」になりたいと思っている自分もいた。私は、アメリカで出会ったあの美しい女性の姿が頭から離れなかった。そう、私は強く生きると決めたんだ。これからは、笑われても、冷たい視線を送られても気にしない。なんといっても自分にしかない個性だから。

これから日本は、オリンピックなどでたくさんの外国人との関わりが増えてくる。そんなとき、日本人は外国人に対してどのような対応をするのか。日本に住んでいるハーフとして、日本の優しさを世界に広めていきたい。

今でも、人種差別は無くなってはいない。無くさないといけない。いや、あってはならない。ちょっとしたことであっても、相手を傷付けてはならない。みんな同じ人間だ。肌の色や人種が違うからといって、差別をしてはいけない。

私の髪を可愛いと言ってくれる人がいる。羨ましいと言ってくれる人がいる。私は、たった一言だけれど、とても嬉しく感じる。なぜなら、自分の髪や肌の色は好きではなかったから。みんなと一緒ではなかったから。でも、そんなことは気にせず、仲よくしてくれる友達がいる。私は、その優しい友達とアメリカで出会ったあの「カッコイイ女性」のおかげで強くなれた。私も、私がしてもらったように、相手に喜んでもらえるような一言をかけられるようになりたい。相手を勇気づけたい。そして、強く生きてほしい。

笑顔があふれる未来のために、今日も私は「強く生きる」。